
三つ頭の鳥

黄泉ジュノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三つ頭の鳥

【Nコード】

N5298BA

【作者名】

黄泉ジュノ

【あらすじ】

僕は鳥だ。

そんな事を思っている多重人格者、黒奈は死亡しトリップするが、動揺&危機感0。

三つの人格の一人、魔法専門の主人公、準は気合でウィグモア魔法学院へ入学。

周りの中から色々と問題児がいる中上手く立ちまわれるのか!!

そして鳥は、

僕は籠の中の鳥だ。

飼い慣らされた鳥だ。

可愛いと言われ続ける鳥だ。

外へは行けない鳥だ。

鳥は呟いた。

飼い主は絶対だ。

鳥の世話をするのだ。

可愛いと愛で続けるのだ。

鳥は続けて言う。

籠から出るべきだ。

空を飛ぶべきだ。

自由になるべきだ。

鳥は飼い主を殺した。

飼い慣らされた鳥は出られない。

飼い主から逃れられない。

一人で生きていけない。

ならば

二人なら出られるだろう。

二人なら逃れられるだろう。

二人なら生きていけるだろう。

一人が二人になった。

そして鳥は飛び立った。

大きく弧を描き飛び立った。

そして鳥は、

第二話、三とトリップ

目を開けると青い空
僕の大好きな青い空

「(……あれ?)」

準はすぐさま飛び起きる。

「(……どこ?)」

・
・
・
・
・

「こんばんは、咲崎黒奈君、で合ってるよね?」

「そうですね、いきなり人の後頭部ぶん殴って言うセリフじゃないですね?」

エプロンに黒いタートルネックを着た男の問いに、準は冷静に答えながら周りを見渡す。

どうやら古びた工場の様だ。

最後の記憶では道を歩いていたので、殴られ気絶している間に連れてこられたのだろう。

「黒奈君、君は確か二重人格だったよね、二人は別々に名前とかあるの?」

「……僕が準^{じゅん}でもう一人が主^{しゅ}、あだ名みたいなものって言えば理解できますか？」

黒奈は本名で他人にそう言われればそう答えるが、彼は自分の事を、黒奈の準^{じゅん}’と考え、人格同士では準^{じゅん}と言う。

「ああ、理解できたよ、じゃあ君の事は準^{じゅん}君って呼べばいいんだね？」

「いいですが、貴方は一体何をしたいんですか？」

「ああ、別に大したことじゃないんだよ、すぐ終わる」

そう言って男はエプロンのポケットからハンマーを取り出し――

「ああ、そうかそうか、僕は頭をがち割られたんだっけ
決して笑いごとではないのに準^{じゅん}はカラカラと笑う。

「とりあえず、主、主、応答願います」

「……何？」

「へいへい、なんですか？」

周りから見れば自問自答しているように見えるが、準^{じゅん}はそんな事を気にせず、ありえない返事が返ってきた事に眼を見開く。

「人格が一人増えてるつつっ!？」

「……可能性大」

「大っつーか確実に増えてるぜ、本人が言うんだから間違いない」
同じ人物からそれぞれ思い思いに感想を述べる。

ちなみに、一人称が僕と言っているのが準、口数が少ないのが主、荒い口調が新しい人格だ。

「つまり、僕達'は二重人格から多重人格になったんだね」

「きつと死ぬ間際に出来たんじゃねえか？」

「……多少理解」

三人はそれぞれの理解を見せた。

その後準は周りを見渡し街を見つけここは丘の上だと考えるが、

「中世ヨーロッパにでもタイムトリップしたのか？」

「俺的には異世界トリップの方がいいなあ」

「……情報収集を推奨」

「の前に、新しい人格の名前付けるか」

準がそう切り出しそれぞれ案を出していく。

「とりあえず僕や主みたいに序列を名前に」

「かつこいいのがいい！アークとかシュナウザーとか！！」

「……シュナイザーは犬」

「し、知っているぜ！んな事！とにかくこいいやつ！！」

「……どうでもいい」

「ああ！！どうでもいいってぶっ飛ばすぞゴラアツ！！」

「あーうるさい、お前の名前は三だ、異論は一切受け付けない」

二人の会話を中断させ不機嫌気味に言い切る。

「それじゃああの街の図書館に行こうと思ってるんだけど、言葉通じるかな？」

「通じなくても行くしかねえだろ」

「……選択権なし」

黒奈はハア、とため息をつき、重い足を運んだ。

・ ・ ・

「どうやら俺の異世界トリップが当たってたみたいだな」

三が分厚い歴史書を開きながら呟く。

「なんでこの文字読めるんだ、明らかに日本語じゃないよね、ていうか魔法って」

「……理解し難い」

二人は理解出来ないという感じだ。

「あー、とりあえず、僕達にも使えるかな、魔法」

「最近発行の歴史書には、俺達にも通えそうな学校が乗ってるぜ」

「……決定」

黒奈はその学校へ向かった。
三人

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5298ba/>

三つ頭の鳥

2012年1月14日19時45分発行